

戦時下のリベラリストの東洋言説

―谷川徹三の1930年代末期の〈東洋と西洋〉論をめぐって―

張鈴

要旨

1940年前後、〈東洋と西洋〉という話題が日本において、時代の原理として熱く議論されていた。その時期に生み出された言説に、この話題を「正面から見きはじめようと試みた」一人と思われる谷川徹三の論述がある。小論は谷川徹三の『東洋と西洋』（1940年、岩波書店）に収録された「東洋と西洋」という三篇の文章を中心に、彼の〈東洋と西洋〉論というテーマの成り立ちや展開、及びその後ろの隠れた史観と民族観の考察を行い、更に戦時下のリベラリストである谷川徹三と同時代人である三木清、和辻哲郎の思想的関係を探ろうとする。また、〈東洋と西洋〉論が中国観と関連するため、小論はこれからの谷川徹三の中国観論考に向けた準備作業でもある。

はじめに

谷川徹三（1895～1989）は愛知県に生れ、長い人生の中で、きわめて多岐にわたった活動をしていた。彼は京都帝国大学哲学科卒業で、西田幾多郎に学んだが、三木清、林達夫と同様に東京へ「ディアスポラ」したメンバーだった。他方、「親鸞・ホイットマン・ゲーテなどの影響を受け、また阿部次郎・和辻哲郎らの漱石山脈に近く位置づけられる。阿部・和辻ら漱石門下と同じく教養主義に立」ち、「哲学的教養者」で、「啓蒙家」といわれる¹。

「文学形式問答」で形式主義論争に止めをさして文壇に登場して以来、谷川は「多面的な教養による良識的な文化人の代表的な一人として思想・文学・芸術の評論を発表」²しただけではなく、茶道、宮澤賢治の研究者、平和運動の参加者としても有名である。一方、谷川徹三の研究はまだ不十分であり、特に戦時下の言論・行動に注目する研究はあまりない。

筆者は一貫として日本知識人の中国を見る目に注目しており、谷川の上海での軍部批判の言論に注意を引き付けられた。しかし、谷川の中国観は〈東洋と西洋〉論と関連しており、〈東洋と西洋〉論をめぐって考察しなければ、谷川の中国観は論議できない。支那事変こそ、谷川にこの東洋と西洋の対立の現実感を持たせた。中国旅行を通して谷川は「大きな東洋」³を実感した。そこで、小論は谷川徹三の1930年代末期の「東洋と西洋」という三篇の文章を中心に、リベラリスト谷川徹三の〈東洋と西洋〉というテーマの成り立ちや展開、及びその後ろの隠れた史観と民族観の考察を行い、よって谷川徹三の一側面を探ろうとする。

1. 〈東洋と西洋〉論の成り立ち

1930年以前、谷川徹三は「一人の先輩」に、アナトール・フランスの『白き石の上にて』（1905年）を勧められた。『白き石の上にて』は、科学的社会主義ユートピア小説で、未来の人々の口を借りて当時の時勢、即ち日露戦争を評論する節がある。谷川はその小説を読んだが、日本とロシアの戦争で東洋と西洋の対立に実感を持たなかった。「一つは政治の問題に全く無関心

¹ 高橋新太郎 他「谷川徹三」、木俣修 他 編『現代文学講座（第8集）昭和編 I—人と作品』（明治書院、1961年）68頁。

² 小田切秀雄 編『現代日本思想大系 17』（筑摩書房、1964年）422頁。

³ 谷川徹三「北京日録抄（完）」『思想』（岩波書店、1940年8月号）219頁。

だったから」⁴だった。しかし、日中戦争勃発してから、その戦争の意義を求めるようになった谷川は、東洋と西洋の対抗関係を身近に感じた。

ところで、この「一人の先輩」は、谷川の親友でもある和辻哲郎と推測される。和辻哲郎はこの小説にある黄禍論の台頭に対する批判と一致した視点を持ち、西洋と対抗することを日本の「世界史的意義」と考える⁵。それを思想の出発点として、和辻は「十五年戦争」、特に「大東亜戦争」を近代の資本主義文明の超克、アジアの解放のための戦争とみなして支持していた⁶。こういう「世界史」の史観は、谷川の〈東洋と西洋〉論の根柢でもある。

1930年代後半に、『白き石の上にて』の所謂「日露戦争の世界史的意味」が「一般知識人の常識になつてゐる」(292頁)。谷川徹三はその時期、〈東洋と西洋〉をめぐって、同名の三篇の「東洋と西洋」を含む多く文章を書いた。「東洋と西洋 一」は初出が『中央公論』1938年11月号で、「当時の日本における東洋観の理論的分析をおこな」⁷い、「東洋と西洋 二」は原題が「日本における東洋と西洋」で、『アジア問題講座 思想・文化篇(二)』(創元社、1939年)の巻頭文である。「東洋と西洋 三」は1939年7月21日、24日、27日、中国・奉天(瀋陽)で開催された満鉄夏期大学での講演の速記によるものである。

三篇の「東洋と西洋」は1940年の『東洋と西洋』(岩波書店)に収録された。『東洋と西洋』の書名について、谷川は「最初の諸篇の題名から採つたのであるが、他の諸篇も、いずれも私が特にこの問題に関心をもつてゐた時期の所産として、多少の別はあつても直接また間接にそれに触れてゐる」(1頁)とのべる。1942年、『続 東洋と西洋』(近藤書店)が上梓された。ついでながらいうと、谷川は1939年からの2年間、4度も中国に渡って、華中と華北を見回った。その所産である中国訪問記「日本の特殊性—上海印象記」、「中国の友に」、「文化上海の問題」などは『東洋と西洋』(岩波書店)に、「支那から帰つて」、「中国知識人の動向」、「日満華の文化提携」などは『続 東洋と西洋』(近藤書店)に収録される。谷川にとって、中国への関心はやはり〈東洋と西洋〉論の各論に位置づけられる。

1940年1月書かれた「思想の再建」の中で、谷川は東洋と西洋の対立を当時の第一の問題として捉える姿勢をみせた。

思想の動揺は現在世界を通じてのことであらう。それはそのままに今日の世界の現実を反映するものである。

しかしわれわれの問題はその一般的な問題にあるのではなく、その一般的な問題を背景にしなが、われわれの問題としての特殊性をもつてゐるところにある。その特殊性を私は第一に東洋と西洋との問題として捉へることができると思ふ。(295頁)

思想の動揺は「東洋の認識と東洋に於ける日本の位置の自覚」という問題に対する「無力感」からきた(300頁)。言い換えれば、〈東洋と西洋〉の問題は絶えずに拡張している日本帝国の位置づけの問題であり、必ず「日本の位置」の特殊性の議論と結びつく。

一方、谷川は戦後になつても〈東洋と西洋〉をめぐって書き続けた⁸。「東洋と西洋」という名

⁴ 谷川徹三「事変二周年記念日に」『東洋と西洋』(岩波書店、1940年)293頁。以下、『東洋と西洋』からの引用は()で頁数を記す。

⁵ 和辻哲郎「白禍」『和辻哲郎全集 第22巻』(岩波書店、1991年)193頁。

⁶ 米谷匡史「和辻倫理学と十五年戦争期の日本」『情況』(情況出版株式会社、1992年9月号)116頁。

⁷ 王屏著 西本志乃 他 訳「日本人の“中国観”の歴史的変遷について」(『広島大学マネジメント研究』、2004年、266頁。)

⁸ 谷川徹三は『東洋と西洋』(岩波書店、1940年)、『続 東洋と西洋』(近藤書店、1942年)に続いて、戦後は『東洋と西洋 改訂版』(角川書店、1949年)を出した。三つの「東洋と西洋」は岩波版に収録されたが、戦後の角川書店の改訂版には「東洋と西洋 二」と「東洋と西洋 三」がそれぞれ「東洋と西洋」、「東洋と西洋との一問題」

の地域ならびに歴史的文化的意味の中で日本のおかれた位置を確かめることを必要とする」(254頁) という目的は変わらないが、そのような東洋と西洋において日本の「特殊性」は強調されなくなる。東洋や西洋の意味も変りつつある。

東と西とは今日の用法では東洋と西洋を意味すると共に、一層深い含蓄において、ソヴェト圏とアメリカ圏とを意味する。東洋と西洋という時、そこには古い文明の伝統がそれぞれの背後にあり、ソヴェト圏とアメリカ圏という時、そこには異なったイデオロギーがその背後にある。⁹

というように、1930年代末期の意味での東洋西洋対蹠論がすでに終焉を告げたことがわかる。

2. 〈東洋と西洋〉論について

2.1 東洋の構築

東洋や西洋の問題を考える時、まず「東洋（西洋）は一つか？」という素朴な質問がよく問われる。

谷川徹三は津田左右吉の「東洋文化なるものが一つの文化として存在しない」(10頁) という考え方にほぼ賛成し、東洋と西洋が共に「地域的にも歴史的にも極めて曖昧な称呼である」(6頁)と認め、「東洋には、西洋がギリスト教とギリシヤ・ローマの文化の伝統によつて一つの統一であるやうな統一ではない」(7頁)ため、共通点が少ないと主張する。しかし、そのため、「東洋」を考える意義がないと谷川は思わない。谷川は東洋諸国に共通点を一つだけ見出した。即ち、植民地・半植民地と植民者の対立である。「アジアの殆どすべての国国が多かれ少かれかういふ問題をもつとき、そこに意味がないとは考へられない」(8頁)。「東洋が西洋に対立して用ゐられる場合には、単独では本来持たなかつた意味を持つて来るのである」(10頁)。

その例として、谷川は「日本の勃興、日露戦争における日本の勝利を、最も喜んだのはさういふ東洋の国国」(9頁)とあげた。「彼等は人種を異にし、文化を異にし、過去に於いて直接には殆ど何等の交渉をもたなかつたにも拘はらず、抑圧されてある東洋の一民族としての一体感から、喜んだのである」(9頁)。日本の勝利を喜んだこれらの東洋の国々は谷川の記事でははっきり示されていないが、孫文の「大アジア主義」という有名な講演で言及した、日露戦争の間スエズ運河を通った時、孫が会ったアラビア人らしい人々の歓声を想起させる。

1938年「東洋と西洋 一」が書かれるまで、谷川が孫文の「大アジア主義」を読んだか否かは判明できないが、谷川の記事を通じて、日本人は「大アジア主義」から日本人に対する肯定だけを読み取り、さらにアジア中の人々が日本の行動を支持するという錯覚が生れたという時代像が伝わる。

2.2 日本の特殊性

東洋は、文化的に統一された地域を実態として示す概念ではなく、西洋との対立から意味を成立す概念である。このような意味での〈東洋と西洋〉の関する最初の質問は、日本だけが近代化を遂げ、今日の日本になるのはなぜだろうか、ということである。この質問には日本の独

と改題されて、修正なしに収録されたが、「東洋と西洋 一」は収録されなかった。

「東洋と西洋」というテーマをめぐって、谷川は戦後、『東洋と西洋』(合著、毎日新聞社、1957年)、『日本人にとっての東洋と西洋』(合著、法政大学出版社、1981年)、『芸術における東洋と西洋』(岩波書店、1990年)という本を続々と出した。

⁹ 谷川徹三「東と西との間の日本」『東と西との間の日本』(岩波書店、1958年)1頁。

特性を求める・確認する意欲が潜んでいる。

谷川は自答した。「国土の条件、国家的統一の緊密、民族的素質の優秀、更に通説に反していへば民族の若いといふこと」(2頁)。つまり、日本はインドや中国の文化を得て、そしてそれらを日本の文化にした。回数を重ねる毎に、日本は新しい文化が移入される前に文化を消化する基礎を整えたから、西洋の文化が日本に入ってから素早く近代化が達成することができる、ということである。

日本を「伝統保持の拠点と新文化受容の拠点」(106頁)とする一方、谷川は中国を「保守固陋」(106頁)という言葉で表現する。その原因は「常に蛮族の侵入に備へてその文化を守らなければ自分達の民族的統一が壊れるといふ危険を感じてゐたからである」とする(106頁)。「古くから自国に優れた文化があつたから」(106頁)、インドの文明は中国を経て朝鮮、日本に伝わったが、中国は日本のようにインド文明を消化しなかった。文化の伝播の終点である日本に対して、中国は文化が経過したに過ぎない、というのだ。

また、単なる文化の保存も何も意味がない。アイヌは「今日の日本人に較べて或意味ではもつと古い文化を保存して」いるが、谷川はそのことを「進歩が遅れてゐる」とする(93頁)。「古いものを保存するとは、他方で絶えず新しく進歩してゐることと結びついて初めて意義が見出される」(94頁)。

日本は地理と文化伝播の面で独特性を持つだけではなく、日本民族の成立と特質も独特であると谷川は強調する。「日本民族は非常に複雑な構成をもつて」(87頁)いるが、「さういふ複雑な血をもつてゐながら、民族としては非常に古く一体化されてゐる」(88頁)。谷川は清野謙次の形態人類学の研究結果を引用して日本の国民を「血族国民」とまとめ、「日本民族は従来同一の言葉を使い、一体の意識を持ってきた」(88頁)ことを強調する。

一見してなにも問題がないこのような「日本民族」には、アイヌ人は含まれていない。下は谷川の人称の使用から分析してみる。

谷川の三篇の「東洋と西洋」には、「われわれ」の多用が目立つ。個人的な思考を表す場合、谷川は「私」や「私共」を使うが、そのほかの場合、「われわれ」の使いが圧倒的に多い。谷川は「われ」と「われら」をめぐって、こう述べたことがある。「われら」を如何なる意味に用ゐるかによつてわれわれはその人の立場と関心を知り、ひいてはしばしばその人が如何なる人であるかを知ることができるであらう¹⁰。このような論説は彼がよく使う「われわれ」にもあてはまるのだろう。つまり、「われわれ」は第一人称としても第二人称としても認められる独特な人称で、他対立においては作者(話し手)は読者(聞き手)を一体として捉えて、「ともに別の他者に対立する(自)たるものとしての取扱いをうける」¹¹のである。

「われわれ」の多用は谷川のほかの文章にも頻りに見られるが、往々にして、「彼等」はあまり現れていない。その場合、「われわれ」は一人称の代用として使われると思われる。しかし、三篇の「東洋と西洋」に話し手と聞き手以外の人を指す「彼等」が何ヶ所に現れる。この「彼等」とは、文章・講演においての「別の他者」に違いない。では、「われわれ」と「彼等」の対立によって何が想像され、誰が排除されるのだろうか。

アジアの過去に触れるとき、谷川は遊牧騎馬民族の「スキタイ」(41頁)を「彼等」と呼ぶ。「日本人」・「日本民族」の起源を解釈する場合、谷川は日本石器時代人、古墳時代人と過去のアイヌ人を「彼等」で指す。ただし、谷川は清野謙次の学説に従い、「今の日本人は」「この国土に最初から住んでいた原住民であるといふこと」(90頁)に依拠して、「彼ら」である日本石器時代人、古墳時代人を「われわれと同人種の人」(94頁)、「われわれの祖先」(92頁)と認

¹⁰ 谷川徹三「われ」と「われら」『生活・哲学・芸術』(岩波書店、1930年)124頁。

¹¹ 内間直人『琉球方言文法の研究』(笠間書院、1984年)36頁。

める。よって、日本石器時代人、古墳時代人は異なる時間にいる「彼等」でありながら、「われわれ」と関連させられ、過去のわれわれである。

異なる空間の人として、谷川は「西洋人」・「西人」・「ヨーロッパ人」はもちろん、日露戦争の日本の勝利に喝采した東洋の人までも「彼等」(9頁)を呼ぶ。東洋は一つということの意味が認められても、日本以外の東洋の人が「われわれ」になることはない。

また、現代のアイヌ人も「われわれ」のなかに排除され、「彼等」と呼ばれる。「今日の日本人も今日のアイヌもいづれも」現代日本人の祖先である「日本石器時代人から由来した」(91頁)ことを認めるにもかかわらず、アイヌ人は「進歩が遅れてる」て(93頁)「今日」においても「野蛮な状態になつてゐる」(94頁)として、谷川のいわゆる「われわれ」の仲間ではなく、「彼等」になる。即ち、アイヌ人は古今問わずに「彼等」として扱われている。「われわれ」と「彼等」の対立は、「日本人」と「アイヌ人」の対立も提示する。このようにみると、「大昔から大和島根に定住し、日本語といふ同一の言語を使ひ、日本民族としての一体の意識をもつて来た」(88頁)という論述は今の単一民族論に見えるが、それはアイヌ人を排除した日本民族論、すなわち「純血論」である。アイヌ人の「遅れ」から、「日本人」の「進歩」が見出される。それこそ恐らく、アイヌ人が「彼等」=他者として果たす役割であろう。満州の土地で「純血論」を論じるのは「日本人・日本民族」の優秀を鼓吹し、朝鮮半島、台湾の所謂外地を排斥し、狭い意味の「日本人」の特殊化する努め以外のなにものでもない。そのような意識は三篇の「東洋と西洋」に浸透している。

2.3 日本の「指導原理」を求めて

度々東洋における西洋と呼ばれても、日本には東洋と西洋の対立が依然として存在していると、谷川が否定しない。この対立について、谷川はかつて「日本の文化の二重性」と形容し、「江戸時代までのあつた古い文化の体系は新しい社会生活に適應できないで漸次失はれようとしてゐるに反して、新しい社会生活に適應するものとして西洋から移し入れられたものは、まだ歴史と伝統とのたしかな地盤をもたないために、どこか宙に浮いてゐる」¹²と指摘したことがある。1930年代末期に至ると、恐らくこの日本文化の二重性がもう主要矛盾ではなくなり、東洋と西洋の対立の矛盾は目立つようになる。日本の内部に東洋と西洋の対立がまだ解決されていないにも関わらず、日本は「アジアに於いて完全な独立を保ち続けた唯一の国」でありながら「アジアにおける唯一の開明せられた国」(104頁)であるから、日本はアジアを指導するのも当然だと谷川が考える。

問題なのは、日本はこの「東洋」の中で、どう指導すればいいか。谷川は日本の原理を押しつけるのには賛成しない。

一民族国家が世界国家となる場合、その民族国家のもつ法や習俗や宗教がそのまま世界的普遍的意味をもつに至るのだといふのである。(引用者：中略)日本を中心とする東洋の新秩序は、まだ現実的には実現されてゐないといふことであり、われわれが頭から日本的原理を押しつけようとする場合には、日本の世界国家たる希望は或は実現せられないかも知れぬといふことである。(17頁)

「日本の世界国家たる希望」をどのように実現するかについて、谷川はこう考える。日本国内は神話と権威によって国家的な統一が遂げた。また、文化そのものは「本質によって常に普遍性を内在させてゐる」(23頁)。ゆえに、外国で日本の指導権を獲得するために、多くの国を

¹² 谷川徹三 「教養について」『私は思ふ』(三笠書房、1943年)213頁。

まねて、「優れた文化に伴い」、「その民族の神話や宗教を他の国に通」（19頁）じさせるべきである。

では、もし優れた文化を持たずに異民族を征服しようとするれば、どのような結果を招くのか。谷川は過去の中国の例を挙げて、「漢人を征服したのも、却つていつの間に漢人の文化に同化せられてしまふ」（19頁）と説明する。この政府批判に見える部分是中国学者の王屏に評価された¹³が、王は恐らく、谷川の「われわれが自己を批評するのはわれわれ自身を強化するためである」（23頁）と宣言したことを見逃したのではないか。文脈からみれば、谷川の批判の原点は、「日本の世界国家たる希望」にある。アジアを握る夢をもつからこそ、日本政府に警告をしたのだ。

このような政府に対する警告、及び上に述べた東洋の構築は、日中戦争勃発後、三木清が発表していた「日本の世界史的意義」、「支那事変の世界史的意義」などの一連の論説と親縁性を示す。三木清は「東洋の統一といふことを、支那事変を通じて実現してゆく」と主張したが、「日本文化は支那に入れば或は支那文化に吸収されてしまふことになるかも知れない」¹⁴と昭和研究会において警告を与えたのだ。

3. 内在化された西洋的価値観

谷川の価値観は西洋的といわざるをえない。それは「東洋と西洋 二」の冒頭にある『マルコ・ポーロの冒険』という映画に関する評論から見られる。

その映画のあるシーンが谷川に強い印象を与えた。中国に来たマルコ・ポーロは火薬を戦争に使ったら有効だろうと思うが、爆竹に火薬を使う中国の老人がそれは残酷だと答えるというシーンだった。この対話が「一種の象徴的意味をも」（30頁）つと谷川が指摘し、東洋と西洋の文化意志の相違を分析する。

東洋人はそんな早く火薬を発明し、かつそれを兵器にも用ゐながら、そこから後の西洋の鉄砲や大砲の発明のやうに在来の戦術を全く変化させる程の新しい武器を作り出すことはできなかった。[中略：引用者] さういふ武器を東洋人はどうして発明することができなかつたか。西洋風の科学と科学にもとづいた技術をもつことができなかつたからである。[中略：引用者] 火薬を発明したといふこと自身はさして重大ではない。その火薬を巨大な文化的意義としたところに問題があるのである。従つて火薬を真に巨大な文化的意義としたヨーロッパにこの存在は先づ結びつく。(31～32頁)

谷川は爆竹に使うか鉄砲に使うか、その違いから「各民族の或は各時代の文化の意志の、また文化の形態の、ちがひが生れる」（31頁）と述べる。

同じく象徴的な意味をもつのは、石炭をめぐるシーンである。中国では石炭は非常に豊富で安い、この「黒い石の方が宝石より興味がある」（34頁）とポーロが見ている。その目には「近代ブルジョアジーの先駆のあらゆる性質を示してゐる」（34頁）と谷川がみようとする。

つまり、石炭といふ天然物についても、火薬という発明品についても、それがいつ頃から、どこで使われてゐたか、いつ頃どこで発明されたかは大して重要ではなくて、それが文明の進路に対して決定的な意味をもつたことが重要なのである。西洋の近代の科学と技術との文明は、その意味をもつてわれわれの前に立つた。(34頁)

¹³ 王屏 著 西本志乃 他 訳「日本人の“中国観”の歴史的変遷について」『広島大学マネジメント研究』、2004年、266頁。

¹⁴ 三木清「支那事変の世界史的意義」『批評空間』II-19、1998年、35頁。

これは知恵に富んだ世界の文明史発展における西洋文明と東洋文明の分かれ道に関する認識である。しかし、石炭を商売に、火薬を戦争に利用するやり方を考えた西洋が認められると同時に、石炭が早くから使用し、火薬を発明した中国が代表する東洋の文明が「さして重大ではない」と判断され、巧妙により一ランク下に位置づけられた。

そもそも、爆竹といい、鉄砲といい、それは火薬の二つの用途にすぎない。爆竹より鉄砲の方が重大な意義を持つという価値判断自体は、西洋文明のシステムを元に下したと思われる。侵略・戦争を考えないところでは、鉄砲は一文の値打ちもないのである。そのため、火薬を鉄砲に使う西洋文明に対するほめたたえたのは、谷川の西洋的価値観が内在化したことを示すほかのなにものでもない。

このように西洋文明を称揚してから、谷川はアジアにおける日本の優位を指摘した。「われわれの祖父達や父達は、かつて見知らぬ姿として初めてそれに接した時、それが文明の進路に対してもつ決定的な意味をすぐ掴ん」で、「直覚によって認識した」(35頁)。

4. 世界史観

戦争について谷川は独自の考えをもつ。世界的視角で、「アレキサンダー遠征、十字軍東征、蒙古人の遠征」を東西交渉史の上で三つの大きな出来事としてあげてから、以下のように締めくくりをする。

第一には、文化の接触交流が常に戦争を機縁として活発になつてゐること、その点戦争は破壊であると共に建設であり創造であること、さういふ事実が考えられます。[中略：引用者] 第2に、しかしながら戦争は短く文化は長いといふこと、つまりあとあとに遺るものは文化であるといふこと、さういふ事実が考えられます。[中略：引用者] 第3に問題にしてよいのは、一文化が異文化の中にはいつて根強くなるには、その異文化の諸要素を取入れねばならぬといふ事実であります。(64頁)

ここに至って、谷川の考えた戦争と文化の関係がはっきりみえるだろう。戦争が文化に刺激を与える、戦争より文化のほうが長い、周囲の異文化の存在が重要という理由で、戦争は悪くないのだ。戦後になつても、谷川はこの考えを変えない。

さらに、谷川は「あくまでそれぞれの民族、国家、文化圏をその民族の原始衝動、国家の政治意志、文化圏の文化エネルギーの対立抗争として見」(67頁)て、白鳥庫吉の二元論のアジア史理論を援用して、さらなる広い世界史という視野でユーラシア大陸の戦争史を提示する。東西の対立の意味で、「満州は諸勢力の均衡の地となり、朝鮮はずつと半独立の状態にあり、日本は完全な独立を保つて来た」(79頁)。日露戦争は西からの力を東にある日本の力で押し返した戦争と見なされる。「然るに日本が満州に拠点をおいてその圧力を世界国家南方に及ぼすに従つて南北の対立が今度は日本とイギリスといふ対立になつた」(80頁)と時勢を説明する。ロシアを西洋に見なし、この西洋の圧力に対する日本が抵抗の重役を担い、満州がその抵抗の拠点とされた。

世界の各勢力の争いを南北か東西の争いに簡素化する白鳥の二元論はアナルート・フランスの日露戦争観と相性がいい。『白き石の上にて』において、日本とロシアはそれぞれ黄色人種・アジアと白色人種・ヨーロッパの代表とされている。日本がロシアに勝つことは、東西の対立において、西の勢力を押し返す第一歩になり、〈世界史的意義〉をもつ。1930年代後半の時点で、朝鮮半島がすでに30年以上併合され、満州にも傀儡国家の「満州国」が成立した。日本

の抵抗のおかげで満州が「諸勢力の均衡の地」となり朝鮮が「半独立」となったと考えるのは、『白き石の上にて』がもたらした「日本の世界史的意義」という錯覚にとらわれた証しである。

しかし、谷川は日本の西洋を克服する使命を夢見ても、白鳥の歴史理論を提示して、日本の動きを歴史的に相対化する視角で眺めていた。「私はさういふ力と力との角逐をひろく世界的に眺めてみました」(111頁)。この態度は比較的冷静でより柔軟性がある。それは彼の考えがよく穏やかだと言われるゆえんであろう。彼が重要とするのは、「現在の事態の認識の上に立たねばならない」(112頁)。そして、「現在の事態は、常に過去の発展であると共にまた未来への方向を指示して」(112頁)いる。こういう考えは谷川の考えに通底したものである。

おわりに

小論は谷川徹三の思想の一側面を描こうとした。日中戦争をきっかけに〈東洋と西洋〉という話題に現実感を持つようになった谷川徹三は「東洋と西洋」という題にした三篇の文章で、「東洋」を肯定的に構築し、東洋と西洋という曖昧なテーマをめぐって多くの言説を組み込んで論説した。三木清と和辻哲郎の両方の影響が見られる谷川の〈東洋と西洋〉論は大きく二つの問題に分けられる。一つは「なぜ日本だけが西洋化に成功したか」でまとめられる、日本国内の〈東洋と西洋〉問題である。この質問に答える試みを通して、谷川は日本の強みを見出し、一種の自我肯定を強化した。そのような自我への肯定を維持するからこそ、谷川は二つ目の「アジアにおける指導権」の正当性を疑わず、「どう指導すべきか」という質問に横滑った。西洋的価値観に浸透された谷川は日本のヘゲモニーを強化するためにいろいろ努力したあげく、日本は更に西洋に学ぶ必要があるという結論を出した。谷川のこのような論説は結局、帝国主義的思想から逃れることが出来ず、西洋が作った秩序に回収されることになる。彼のテキストの後ろには、西洋的・インターナショナルな思想資源があるが、その所産は日本色が極めて濃い。また、「東洋と西洋」論から、谷川の柔軟性のある歴史観と純血論に近い民族観が垣間見える。

「東洋と西洋 二」を書く前の1939年1月、谷川は始めて中国・華東地区へ旅行に行った。2回目の中国旅行の間、彼は奉天（瀋陽）などの都市で「東洋と西洋 三」を講演し、満州地区を回った。何度もの中国旅行の結果として、彼は服装も建築もライフスタイルも、中国文化が欧米文化とかなり近いことを発見した。谷川は「支那を初めて、内から見ることができた。同時に日本を外から見るが出来た」¹⁵と感懐した。しかし、中国旅行は谷川の視角を変えることなく、その代わりに、「大きな東洋といふものを感」じ、「日本の特殊性」というイメージが強化された一面が見られる¹⁶。加えて、そのような「日本の特殊性」は〈東洋と西洋〉論に現れる日本が唯一の西洋化に成功したという特殊性とは違う。その相違と関連、及び谷川の中國観についてはこれからの課題である。

(ちょう りん／名古屋大学大学院博士後期課程日本文学専攻)

¹⁵ 谷川徹三「内外から」『読売新聞』（1940年1月16日付）。

¹⁶ 谷川徹三「上海だより」『婦人公論』（1939年3月号）。